

公益財団法人

## 住吉隣保事業推進協会ニュース

No.12

■編集・発行 公益財団法人住吉隣保事業推進協会  
 ■編集発行人 友永健三

公益財団法人住吉隣保事業推進協会 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東5-3-21  
 TEL 06-6674-3732 FAX 06-6674-7201

## この号の内容

- 1 市民交流センターすみよし北特別事業『遺跡から見た古代の住吉』(1)～(11)

- 2 公益財団法人住吉隣保事業推進協会の動き(11)～(12)

## 市民交流センターすみよし北・特別事業

～住吉さんと地元の1800年から学ぶ～

## 遺跡から見た古代の住吉

講師：長山雅一さん

(財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所所長、通科学大学名誉教授

3月14日13時30分から「住吉さんと地元の1800年から学ぶ」の講座(市民交流センターすみよし北の特別事業)の第12回(最終回)として、池田外美雄NPO法人かなえ会理事長の司会で、(財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所所長(流通科学大学名誉教授)長山雅一さんにお話し頂いた。長年の発掘調査の蓄積を基にした「遺跡から見た古代の住吉」と題したお話は、住吉津の所在など、これまでの「思い込み」に一石を投じて頂いたものであった。(なお、この報告は当日の講演を事務局でまとめ、講師に手を加えて頂いた。)

## はじめに

「住吉1800年」のスタートの時に、司会の池田さん達のグループも住吉大社とともに協力された大阪市立美術館の特別展「住吉さん～住吉大社1800年の歴史と美術～」を見せてもらったり、それに基づいて歴史ウォークをしたりというお付き合いがあります。この講座の締めくくりということですが、私で適当なのかどうか分かりませんが、お話ししたいと思います。

さて、私のプロフィールに「大阪での文化財行政の基礎を築いた」と過大な紹介を頂きました。1972年ぐらいまでは、全市域にわたって文化財の調査をすることはありませんでした。当時、大阪市は『大阪市の文化財』という冊子を出していました。そこには国宝・重要文化財というもの丁寧説明されていました。難波宮については山根徳太郎先生の頑張りによって発掘が続いていましたの

で、掲載されていまして。しかし、一般の埋蔵文化財の記載は殆どありませんでした。

載せられていたのは、住吉区の遠里小野遺跡・東住吉区の桑津遺跡・旭区の森小路遺跡ぐらいです。戦前の昭和一桁時代に、発掘調査をしています。それがいつ頃かということは興味深いことです。戦前の昭和15年の前です。その頃に発掘しているというのは、意図があったと思われます。昭和15年という年は、戦前で云う皇紀2600年ですから、神武天皇の遺跡を掴みたいという狙いがあったようです。報告書も出ていますが、最初の意気込みに比べ、期待した遺跡であることが証明できないため、途中から先細りになったと見られます。何故かということ、2600年を顕彰するようなことができなくて、石器時代であるということが明らかになったただだからではないかと私は思っています。

大阪では、弥生時代の遺跡がこういうことがきっかけで調査が行われました。勿論、遠里小野・

桑津・森小路という地域は大阪市域が拡大していく中で住宅地が拡大される中で、調査が必要となったという経緯もあります。しかし、文化財として何を目的とするかという時に、当時は政治的な意図が後ろに潜んでいたと私は考えています。考え過ぎかもしれませんが、私はそう考えています。

また、大阪市内には大阪府が史跡として指定した文化財があります。難波宮域に接した越中町に細川ガラシャがいた屋敷跡に越中井という井戸が顕彰されています。それから和気清麻呂が関係したということで茶臼山が史跡に指定されています。さらに蒲生薫平が大阪の肥後橋の近くに住んでいたということでも府の史跡があります。それらの人が顕彰されるのは、歴史上で天皇を支えた人達だからです。和気清麻呂は河内の水を大阪湾に落とす工事をしたのですが、成功しなかったのですがその後、天皇家に功績があったので顕彰されたのだと思います。

そのもっとも典型的なものと思っているのが、府史跡である細川ガラシャの越中井です。中央区越中町にマリア大聖堂があり、その裏に越中公園がありますがその辺りの一角に細川越中守が住んでいました。そこに行きますと碑文があります。ガラシャの辞世の句「散りぬべき 時知りてこそ世の中の 花も花なれ 人も人なれ」があり横に『広辞苑』を作った新村出しんむらいずるさんの文章が刻まれています。関ヶ原の合戦に徳川方に寝返らないようにするため、大坂城に西方の大名の奥方に入れるというのが石田三成の命令でした。細川ガラシャはそれに応じませんでした。人質として大坂城の中に入ると細川越中守が自由な行動をとれないので自ら命を絶ったといったことが書かれています。

そういう碑を建てたのが昭和9年のことで、建てたのは大阪婦人連合会です。お金を出した人の名がずっと書かれています。女性は一人数で、ほぼ全員が男性でした。昭和9年という歴史的状況を考えると目的は明確です。当時の文化財の扱いはそういうものでした。戦後になって文化財の扱いの方向が変わってきました。

### 文化財の扱いの変化

大阪市内では、山根徳太郎先生の非常な頑張り  
で難波宮に結びつきました。しかし、難波宮以外は全く知られない状態でした。勿論先程の遠里小野・桑津・森小路は発掘をした実績があるので、知られてはいました。1970年頃の大阪市が出した資料には「大阪には難波宮以外の遺跡はない。」と書かれてありました。ですから私が文化財保護の仕事に就いた時は、難波宮以外にする仕事はありませんでした。

1972年というとお気づきの方もおられると思いますが、高松塚が見つかった年です。不思議な事にそのころ世界で文化財に関わる新しい行動が起こされています。たぶんご存じの方はないと思いますが、エコミュージアム運動というのがフランスで起こりました。エコロジー (ecology、生態学) とミュージアム (museum、博物館) を組み合わせた造語で、フランス国内で地域に根ざした博物館運動をやろうという運動です。日本でもエコミュージアム研究会というものがある活動していますが、各地方自治体が弱体化してくる中で、段々力が無くなってきました。地域興しが盛んな時には熱心に地域自治体がお金を出してくれましたが、今は少なくなっています。

最近力をもっている世界遺産が、やはり1972年にユネスコで認められました。エジプトのアスワン・ハイ・ダム工事のためにアブシンベル神殿が水没するというのをなんとかしようということで、世界中のお金を持っている国が支援をしました。お陰でアブシンベル神殿の彫像は安全なところに移動されました。それが一つの方向として決まったのが1972年でした。日本でも公害問題が一定の方向性が出来てきた時期でもありました。

そういうタイミングで高松塚が出たものですから、文化庁も日本の文化財についてもっとやらないといけない、忘れていないものはないか総点検をしろという話になり、予算が付きまして。私が大阪市の職員になったのがその年でしたが、貰ったお金で分布調査をしました。今まで遺跡があるといわれているところの資料を集めました。私一人ではなく、大学の後輩に手伝って貰ってやりました。そして、具体的に現場にしてみると、至る所に遺跡が残っている可能性がありました。どういうところかということ、学校の運動場・公園・市営住宅でも平屋建ての建物とかです。そういうことが分かると、大阪市内には文化財はない、都市の開発が進んで潰れているのだというのはウソであると分かりました。別にそれ以前の教育委員会の人が敢えてウソをついたのではないのです。認識がなかっただけです。そういうことでどうしたのかということ、とにかく土の下を掘る仕事があったらそのぞきに行こう、土の下から出てくるもので遺跡の痕跡の手がかりが出来るだろう、ということで土木関係の道路を掘るような仕事を徹底的に教えて貰う事にしました。

これも幸か不幸か分かりませんが、大阪市内では、その前に天六で地下鉄工事の際に、ガス爆発があり、そのため大阪市の土木関係者は、毎月きちんと事業計画を提出してみんなで協議する会を作っていました。それを知ったものですから、その会に出席させて貰い、資料を貰い、その前に出

来た地図をもとにして地図の所にあたる工事は皆見せて欲しいと言ひ、見せてもらいました。すると意外なことに、細かい所から土器が出てくることが分かりました。今日も色つきでないのだからにくいのですが地図を入れました。そういう地図を刊行する時に遺跡の範囲に線を引かずに丸とか四角で囲み、色付きにしました。お寺の跡とか限定されるもののみ線を引きました。丸いところは何かというと、ギリギリの所に工事があつたら見に行きたいので、見せて欲しいと言ひました。遺跡から外れていると言われたら、外れているのではなく、ここまでしか分からないということで、滲み出ている所に遺跡が続いているかもしれない、人間の生活は簡単に線を引けないのだ、といったことを言ひながら見せてもらいました。それによってずいぶん分かるようになりまして。1972年から75年くらいの間で全体で60カ所か80カ所というオーダーであつたのが、今では140~150カ所に拡大しています。それほど大阪の中には色々な遺跡があることが分かってきました。

#### 住吉大社と周辺の遺跡

そういう中で住吉さんのお話なのですが、住吉大社の周辺にそういう遺跡があるのか無いのかということです。当然1800年も経過している住吉大社のことですから、いろんな歴史のもとにあるに違いないのですが、遠里小野遺跡ぐらいしか分かりません。この界隈では、住吉区ではありませんが西成区の岸里で1950年代に井戸掘りの際に土器が出てきて報告され、知っている人はいたのですが文化財だということでの認識はできていません。その土器は鹿児島から出てくる土器と同じ土器であり、縄文時代の終わりごろに鹿児島と大阪の交流があつたのかという問題がありましたが、最近のように文化交流を熱心に研究することがなかったのと、井戸掘だということがよく分からないまま眠っていました。しかし最近恵美須町で発掘調査をしたところ、同じような時代の同じような傾向の土器が出てくることが分かりました、これによって大阪と鹿児島との関係が今後いろいろ研究できる条件が出来たのではないかと思います。そんな風に、土から下で出てくるものというものは偶然の機会がないとなかなか研究が進みません。そういう中で住吉大社を中心とした地域で何を期待しているのかということです。

『大阪市史』は明治に幸田露伴の弟、幸田成友が出した立派なものが8冊程ありますが、大阪市は、昭和が終わろうという時期に『新修大阪市史』を作ろうとします。そこで第一巻の考古・古代編(1988年3月刊行)をお手伝いしました。それで大阪市内を歩いてみると意外なことが分かり

ました。住吉を含めた天王寺から北の地域に、古墳があつたとおぼしき地名がいっぱい出てくるといことです。丹念に調べると確証は無いのですが、住吉大社が置かれているこの地域は古墳であつたのではないかと、古墳の可能性がありそうだという考えに至りました。もっとも確実なのは東住吉区にある山坂神社で、まさに前方後円墳の上ののっかっているのではないかと思います。この界隈では、この会館の隣にある荘厳浄土寺の境内の端に弁天塚がありますが、あれも小さいですが前方後円墳です。住吉さん周辺にもたくさんの重要な文化財が埋もれていますが発掘をするチャンスがなければ見つからないわけです。今日は僅かな中からやや強引にしゃべってしまうことになると思います。

住吉神社とは何か。安直な方法ですがホームページをあけて見ました。摂津一宮であり由緒が深く、信仰が篤く全国2300社余の住吉神社の総本社であると書かれています。住吉大社の歴史というところで、神功皇后が住吉三神、そこつのおのみこと底筒男命・なかつのおのみこと中筒男命・うわつのおのみこと表筒男命を招来し、この地にお祀りし皇后も神として祀られるようになったと書かれています。住吉大神は海の神、航海の神だと私は思っています。話が前後しますが1980年代の後半に平野区の長吉長原で発掘したら古墳が出てきました。長吉長原の古墳はもっと前からたくさん見つかっているのですが、その古墳の堀から埴輪きいとばるの船が出てきました。復元して見ると西都原古墳といった所から出てくる船とはちょっと違った、底が二重になった船です。それを復元して研究会のようなことをしたら、こんな船で本当に航海できるのか、と指摘されました。1980年代後半というのは景気が良かったせいなのか、実際作って海に出たらいいということになりました。そんな材木は無いよということ、北米に行ったらあるということになりました。出土した船の10倍の大きさの船を造るのに直径3mの木を捜せということになり、神戸商船大学の松木啓先生がすぐアメリカへ飛ばれて、適材を見つけてこられました。こういうことでやるのだと話をしたら山の持ち主が喜んで、それなら寄付してあげると、ただで木をくれました。そういう恵まれたことで船を作って、釜山へ行こうという計画を立てて、実際漕いだら上手くいきました。

その時に住吉さんと関わり合いを持っていません。住吉さんが海の神であり、遣唐使も住吉大社へ来てお祓いを受け中国へ行きます。埴輪を復元した船も住吉さんでお祓いをして貰いました。そういう関係で、航海の安全を祈る神様だと私たちは思っていました。住吉大社のホームページによ

るとまずはお祓いの神様で、禊祓<sup>みそぎはらえ</sup>の神様であり、それから航海安全の神様であり、次に和歌の神様であり、農耕の神様であるとされています。こういうものと遺跡とをどう絡めてお話しをしたらよいかと考えていましたら、この講座の第1回目の京都大学名誉教授上田正昭先生のお話の資料がありました。これを見ると難波津が大阪湾の表玄関であり、こうなったのは天武天皇が、壬申の乱で皇位をとって飛鳥に戻り、摂津職<sup>せつしき</sup>を設けられたことからである。天武六年（677）に港を管轄する、国より一段上の格式の摂津職が設けられ、この頃から難波津が有力になってくる。また、それに対して住吉大神は大阪湾の海民、海の民の守り神であり、その海の神を統括している氏族が津守氏である。といったことを話されています。地名にも津守がありますが、つい最近まで、住吉行宮跡といわれる所に津守さんというお家がありました。これは歴代住吉大社の宮司をされていたお家です。津守氏が古代以来この辺りを管理し、住吉の大神を祀っていたということです。朝廷の尊敬をあつめる神でもありました。

そこで住吉津と難波津というものをどういう風に考えたらよいかを見てみようと思います。先程の私の経歴紹介でも学生時代から難波宮の発掘に参加したと言って頂きましたが、そこで色々お教えを受けたのは、難波宮の発見者、山根徳太郎先生でした。その先生は詳しく根拠を明らかにしてお話しをされなかったのですが、されたのに私が聞いていなかったのかもしれませんが、山根先生のお話では、住吉津は本来は今の上町台地の北端、北西の部分の天神橋とか天満橋の辺りではないのか、それが今のところに移っていったのは時代が変わってからだろう、住吉は（話の中でスミヨシとスミノエを厳密に使っていませんが、古代においてはスミノエの津と呼ぶのが正しいと思います。スミヨシというのは平安時代以降の話だと思います。）本来は上町台地の北の方、今でいうところの難波津辺りにあったのではないかと、それが難波に都が出来てその地域が整備されるなかで、住吉の神様をお祀りするのと同じように住吉津が移ってきたのではないかと感じました。山根先生がちらっとそういうお話しをなさいました。そこでこの話はここで留めますが、上町台地の上がどんな風に見えるのか考えてみました。

#### 大和王権と上町台地

私は大阪で難波宮の調査をさせて貰い大阪の文化財を扱っていましたが、1993年に流通科学大学に移り、大阪を西の方から眺める機会が出来ました。ちょうど明石大橋が出来たあとでした。大阪湾を西の方から通してみるとおもしろいことが分

かりました。きちっと図面の中に表示できなかったのですが、レジュメ2ページの地図が大阪湾の地図です。少し灰色に塗りつぶしてあるのは台地の部分です。白い部分が低い部分で大阪平野と書いてあります。その左の方は、大阪がどんどんと広がっていった時期の部分です。ですから古代においては上町台地しか陸地は無かったです。資料1の地図を見て下さい。



図31 古代における交通網と朴津

（『平野区誌』[平野区市編集委員会編2005]に加筆）



往時には、上記図の難波宮、四天王寺、住吉大社、仁徳陵は、大阪湾の入口に近い明石海峡から見たと考えている。（長山）

真ん中の所に「図31古代における交通網と朴津」とありますが、この番号は報告書の番号を残したものです。一番上に難波津・難波京があり、下がってくると四天王寺があり、さらに下がると住吉大社・住吉津があり、それから下がると仁徳陵とあります。仁徳天皇が祀られたかどうかは別として、上町台地上に一定の間隔を置いたモニュメント、ポイントになるものが置かれています。私は神戸の大学に勤めて、大学の近くの明石に行って分かったことがあります。明石大橋は明石の地域と淡路島とを最短に結ぶところに橋脚を立てています。最短になる岬を越えて西から船がやってきて岬を曲がったところで左を見ると神功皇后の伝説とも絡む五色塚が見えます。この古墳

が見えた時に船の舳先が何処を向いているのかに関心がありました。実際に確認できていませんが、図面の上で明石海峡を入ったところから真っ直ぐに線を引くと、最初にストレートに見えるのがどうやら仁徳陵辺り、少し意識して左を向くと住吉大社が見え、四天王寺まで見えるようにしようとするとグッと舳先を回さなければならず、難波宮まで見ようとするとさらにそうです。何を言いたいのかというと、5世紀頃に、明石ぐらいからいよいよ大和王権の圏内に入ったということを知らしめようとする政治的意図があるのではないかと私は考えました。何故かということと五色塚古墳は海に近く、すぐ後ろは山で農耕地があるのでもなく、葺石ふきいしといって石を張り詰めていて、遠くから見て古墳と歴然と分かります。大和の古墳の3分の2くらいに縮小した相似形の古墳であるという考えもあります。大和王権の持つ前方後円墳だよと言うことを見せようとしている、ここから大和王権の地域だと言うことを示そうとする、ある意味の政治的シンボルだと思いました。正しいかどうか分かりませんが、そういう風に考えました。何故そんなに力を入れて言うのかというと、蘇我氏が滅びる大化の改新という事件のあと都が難波に移ってきて、翌年の正月に大化の改新の詔というのが発せられます。その中に行政改革的なものがいっぱい盛り込まれています。これは大宝律令とか後の政治的なもので潤色されたものだと言われているが、一つ興味深いものがあります。畿内制を敷こうとしますが、その畿内制の中で畿内のポイントが4カ所打たれています。赤石

(明石)の櫛淵くしづちが西端で、南は紀伊の兄山せやま、東は名墾なばり(名張)の横河、北は合坂山おおさかやま(逢坂山)でこの範囲が天皇の権力が及ぶ中心地、畿内だと書かれています。その中心地の西端にあたる所に明石の櫛淵があります。明石海峡を通り抜けて左を見ると須磨の山並みが見えます。そこには一の谷、二の谷、三の谷という谷があり、まさに谷のある状況は、海から見るとまさに櫛の歯に見えたのだらうと思います。そして都合の良いことにその場所に境川が流れていて、境川から東は摂津国、西は播磨国です。天皇の権力の中心部、畿内なのか外れるのかの境が櫛淵で、その近くに五色塚古墳が築かれていてそこが畿内の西端です。五世紀の段階であれば、明石を入れてそこから最初に百舌鳥の古墳群が見えて、いよいよこれはそういう場所だなあと分かるような仕掛けになっています。古墳の造られたのが四世紀の末ごろと言われていてまさにぴったりです。

おもしろいのは、船が入ってきて、素直に見ると古いものから新しいものへ順に、南の方から造

られていることです。先程の資料1ページの図31で見ると上町台地上の、海から見えるモニュメントが百舌鳥の古墳群・住吉大社・四天王寺・難波宮です。これが一定の間隔で南から北に順次造られています。百舌鳥の古墳群は5世紀、住吉大社は1800年とおっしゃっているので、その説に随うと前後が逆になります。私としては、順番にもっていきたいのですが、最初に見えるのが住吉大社だと解釈すれば、1800年でもいいかとも思います。それから、593年に四天王寺が、645年難波宮が造られます。そう見ると上町台地はまさにシンボルゾーンじゃないかと考えています。

こんな風に考えたのはアテネオリンピックのスポーツ番組を見ていてです。番組の最初にアテネの神殿が大写しで出てきます。丘に神殿が建てられていてそこに人々が住んでいますが、ああいう丘は一つの宗教的な場所であると表現されていることに、上町台地もそう考えると、説明できると考えました。それなら考古学的に何かないのかと考えました。

#### 住吉周辺の古墳

住吉津の後の高台に遠里小野・山之内のムラ(古墳時代)があります。ムラは段々大きくなって、人がたくさん住むようになります。出土した遺物を見るとたこ(いいたこ)壺とか網の錘にするような土製品などの、余り政治的なことや宗教的なことを考えなくてよいものが出てきました。その後の発掘調査で分かってきたのですが鍛冶の遺構が出てきました。原材料の鉄は、当時は船で朝鮮半島から運んできましたから、交通の便のいいところに遺跡が造られていて、住吉津が役割を果たすことに繋がっていないのではないかと思います。玉造りの遺構も出てきました。蠟石のような柔らかい石で加工するのですが、和歌山紀ノ川沿いの滑石が海を通してこの地域にもたらされます。さらに遠里小野・山之内というところで使われている土器の中に関東から運ばれたとおぼしき土器があり、結構、他地域と交流をしている痕跡が見られます。やはり港が重要な機能をしていたといえます。住吉津をどこに置いたらいいのかについては、細江川と海と接する辺りと推定しています。

今は大和川があることによって地域のことが少し分かりにくくなっています。本日お渡しした資料は大阪市文化財研究所の調査に基づいた報告書の中の資料をコピーしました。今持ってきているものは2009年3月に発行された『大阪市住吉区遠里小野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』の中の図面です。右上の「図4 周辺の遺跡」は発掘をした遠里小野の周辺にどのような遺跡があるかという図面です。■で示された調査地の上にあるのが遠里小野

遺跡で大和川までの範囲になっています。その右手に阪和線の上に山之内と書かれていますのが山之内遺跡です。二つの遺跡は重なったところもありますが、大阪市立大学の辺りまで遠里小野といえませんが、分けています。ここに弥生時代から古墳時代を通しての遺跡があります。北へ行き長居公園にさしかかるところに南住吉と書いて丸で囲んでいますが、その上から3分の1ぐらいの所に東西に一直線に書かれているのが敷津長吉線

で、この道路を磯津道と考える説があります。これも弥生時代ごろから始まって古墳時代を通しての遺跡です。その左手に莊嚴浄土寺とあり右上の弁天塚古墳に●を入れています。その左手に続いているのが住吉大社の旧境内です。その北の方に帝塚山古墳群と書かれています。なぜ群なのか帝塚山古墳しかないのではないかと仰るかもしれませんが、たくさん古墳があったと推定しています。レジュメの4ページの4をご覧ください。「上町台地の古墳」と書いてあります。a 住吉古墳群、b 阿倍野古墳群、c 上町・天王寺古墳群と勝手に名前を付けました。住吉古墳群とあるのが図面の帝塚山古墳群です。200mくらいと推定できる大きい住吉古墳・先程の弁天塚古墳・帝塚山古墳があり他に大帝塚古墳・小帝塚古墳という帝塚を称する古墳があります。ありますといながら現在は見つかっていません。見つかっていませんが、資料を見ると出てきます。レジュメの3ページの左の写真は帝塚山古墳を上空から撮ったものですが、右側の図は二つの前方後円墳が重なっています。左の帝塚山古墳が現存するものです。管理している帝塚山学院に鍵を借りられれば、北の端から中へ入れます。その右手に南海高野線が走っているところに現在の帝塚山古墳よりも大きい前方後円墳が描かれています。これが大帝塚古墳ではないかと考えられます。いつ破壊されたのか分かりませんが、図面の上から復元するとこういうことが可能です。さらに南に小帝塚古墳と言っているのか分かりませんが、大帝塚・小帝塚・帝塚と言われていたし、古墳があったらしいと聞いていますのでそういうものが存在したのだと思います。そのあたりを含めて、ここでは帝塚山古墳群と呼んでいます。実際に上から見て古墳の形態が復元できるものを取りましたが、それ以外にも、古墳が存在したことを知らせてくれる資料は色々あります。

どういふものかという住吉から北に阿倍野の方にいくと 松虫塚・大名塚・播磨塚・小町塚という地名が残っています。何らかの形で小さな墳丘らしきものが残されています。塚と呼ばれるものが存在するということから考えて、大阪市史の仕事をする中で古い地名をあたってみました。現

在の地名は何丁目何番地と古い地名は残されていませんが、地籍図をあたってみると、名前がついています。そういう地名を追いかけていくと、塚原・奥塚原といった地名があります。これは天王寺の駅の辺りから阿倍野の交差点辺りに残っています。また、石蓋<sup>いしなみ</sup>という地名が残っています。ひよっとすると石棺の蓋が出てきたような所といえます。四天王寺にいくと宝物館の前に長持型石棺の蓋が並んでいますが、明治の頃は、境内の亀の池と伽藍の間を下ったところに経木を流す場所がありますが、そこに下りていくところに、石棺の蓋が橋のように立てられていました。それも石蓋と言う呼び方ができないのではないので、そういうものが見つかっている所が地名になったのではないかと思います。

金塚というのは現在も阿倍野の交差点から南の方に名前が残っています。さらに墓の前・内の墓・牛追塚・丸山、ここは墳丘の形がかなりあとまで残っていたそうですが何時の頃からかマンションになり分からなくなってしまいました。それから石塚<sup>いしづか</sup>・天狗塚、天狗塚は北と南と書きましたが、地図の上から見ると大変大きい古墳であった可能性があります、余り立派過ぎて、本当にそうかという気がしないでもないのですが、発掘調査をするような機会に恵まれたら分かるのではないかと期待しています。どこかという上町筋の松虫から地下鉄岸里へ降りて行く松虫通りの途中<sup>しょうちん</sup>に、聖天さんというお寺がありますが、聖天さんの前は谷になっているところに道路がついていて、その道路の南側と北側に天狗塚という地名が残っています。上町台地の界限、住吉さんから北にかけては古墳が存在しました。中でも塚原・金原という地名はかなり広範囲に及んでいます。ひよっとするとこれは6世紀にかけて繋がってくるような古墳ではないかと思っています。北摂の高槻には塚原という地名があつて後期の横穴式石室を持った古墳が群集墳として80基も100基も造られている例がありますから、この塚原の辺りもそうではないのだろうかと思います。場所は、大阪市立大学の病院があるところから阿倍野にかけての地域です。そう考えると住吉さんから北へ向けては墳墓の地なのです。しかし住吉さんが目標にされて来る場所は港です。港から何処へ行くかという東を向いて行くと大和に入るわけです。そういう立地条件をどのよう考えたらいいか、果たして単に大和との関係だけで考えるのか、あるいは、住吉の神が祀られている所がどのような意味あいを持っていたのかについて、もう少しポイントを絞りながら発掘調査が出来るとおもしろいのではないかといいことを考えています。

申し上げてきましたように地名で古墳を探ることが大阪のように開発の進んだ所でどの程度具体的に、実際あったことを証明出来るかというのは問題ですが、何故そういう方法をとったのかというと、開発の進んだ所でならこそできることだろうと思っています。そういうことが出来ると確認したのは1970年代の前半でして、大阪の長吉長原で何もない所の発掘をしました。農地や田圃から埴輪が出てきたりするので、地域の人達にここの地名は何なのか尋ねると、そこは「塚のもと」・「塚南」と教えてくれました。おもしろいので地図を作ってみました。「狐塚」「いちがづか」とか塚のつく地名がいっぱい出てきました。「野上」・「野神」という地名がいっぱい出てきてそこを掘るとそこからも古墳が出てきました。そういうことを報告していたら民俗学の先生が言って来てくださったのですが、「ノガミ」というのは野の神の宿る場所でお百姓さんが大事にしている所で、そういうところをちゃんと調べていくことによって古墳の復元が可能になると教えて貰いました。長原だけでなく大阪市内でどこか古墳がないかと捜したのが、先程申し上げた例です。一番残念に思っているのは丸山です。今、屋敷地に丸山古墳跡と書かれているのですが丸山古墳は割に最近まであったはずですが古墳は墳丘が削られてしまっても堀がありますし、その堀に基づいて何かを復元することは可能なので、やってみたいと思っています。

次に住吉大社の所ですが、先程申しましたように古墳があったのではないかと考えています。発掘の機会も幾度かありましたがなかなか見つかりません。が、埴輪は出てきます。円筒埴輪のかけらが出てくることもあります。四天王寺でも埴輪が出てきます。四天王寺の中心の伽藍の後ろに亀の池があり、その間に鐘堂と鼓堂があり、鐘堂の方は掘っていませんが、東の鼓堂は発掘をしました。その時に埴輪が出てきました。そこから真っ直ぐ東へいくと東大門があります。戦前まで建物あったのが戦災で焼かれ、それを復興するという事で発掘をしたのですが、そこでも円筒埴輪が出てきました。単に埴輪がこけているのではなく埴輪棺、棺桶として使われたという痕跡がありました。四天王寺を建てた時に荒墓に建てたという記録がありますが、荒墓というのはそういう場所ということかもしれません。石棺の蓋があるのもそういうことかもしれません。古代のお墓、古墳がその後の信仰の対象・信仰の場所に使われるということが出来るのかもしれませんが、そういう点で四天王寺さんも住吉さんもよく似た条件かもしれません。

#### 住吉大社と四天王寺

住吉大社のなかで発掘をしましたが、2006年の発掘で、6世紀から8世紀にかけての建物の跡らしいものの一部を調査しています。1800年の歴史を持つ住吉大社からするとちょっと物足りなくて、もう少し古いものが出てきてくれないと困ります。考古学的に出てきたものから考えると6世紀の終わりくらいから7世紀にかけて住吉さんは盛んになっていくというくらいしか考古学的には資料はありません。しかし、文献の歴史、『古事記』『日本書紀』といったものを参考にしますと、5世紀に繁栄しており、6世紀に難波津に中心が移っていったといわれています。このことが、山根先生のお話しをした時に住吉の神は本来は向こうにあったという説に繋がると考えています。

それとは別に住吉と四天王寺の関係を考えてみたいと思います。住吉さんには有名な『住吉大社神代記』というものがあります。これは社殿の中に祀られて神様の扱いを受けていたものです。奈良時代に作られたと書いてありますが、作られたのは奈良時代かもしれませんが書かれたものは平安時代になっているかもしれません。どうやら住吉大社と四天王寺との間で領地争いがあり、そのため各領域を明らかにしたものを国の役所に提出したものが残っているのではないかと、領地争いがあると同じものを3部作って国と各所有者が分け持ちますが、そういうものではないかと思えます。住吉大社の研究をされ、神道史の専門家である田中卓という方は、これはもっと古いものだと仰いますが、私たちが客観的に見るとそうではないと思えます。

そこでもおもしろいのは天王寺と住吉のあいだに阿倍野筋南遺跡というのがあります。古墳時代の前期、3世紀の終わりから4世紀というわりに古い時代の古墳時代に竪穴住居や掘立柱の建物がいくつか見つかる集落遺跡があるのですが、そこからは魚を獲るための網・いさを獲る壺・魚を突くヤスといったものが出てきていて、漁村ではないかと言われています。立地条件も、今は移転してしまいましたが、昔の阿倍野斎場があった辺り、ちょうど大阪湾を望むような所にある遺跡です。4世紀の終わりくらいになると衰退し、5世紀以降は集落は存続していません。そんなに簡単に言ってもよいかどうか分かりませんが、住吉大社の領域になっているのかもしれませんが。

#### 八十嶋祭

そこでもう一つ住吉大社の存在を考える時に考えないといけない問題があります。それは八十嶋祭です。これは平安時代の神事です。文徳天皇が即位した嘉祥3年(850)から堀河天皇が即位した元仁元年(1224)までの間の約370年間に30代

の天皇が変わっていますが、22回おこなわれた祭祀です。どのようなものかという天皇が平安京で即位すると天皇の側近の女性が、天皇の着物

(御衣)を持って難波にやってきます。難波の西側の海に向かって仮の祭壇を作り、天皇の祖先を呼び込み、御衣を振り動かします。その衣を持ち帰って、天皇がそれを着ます。そのことによって、祖先から天皇になったことを認められることになり、即位をしたあと1年間ぐらいの間に行われます。生玉神社で薪能がありますが、薪能をやりながらこれまで縁の能がないというので宮司が何とか生玉の能を作りたいと尽力されて、「生玉」という能が出来ました。その主題が八十島祭で、祭の様子とか何故そういうことをするのかが書かれています。ということは本来は生玉で行うべき神事なのです。それが今の記録の上でいくと住吉さんの神事になっています。これは何故なのだろうという問題が出てきます。ここで禊祓ということがでてくるのですが、延喜式の臨時祭の項では住吉系の神々で行われる神事になっていて、生玉神社の神、生島神の名が出てきません。平安時代に、大阪の神様の本来であれば主人公であるはずの生玉の神が勢力を失い、住吉の神の方が主力になったのではないかと思います。住吉大社は摂津一の宮で摂津国で一番の神様です。生玉神社は難波大神と呼ばれ、難波の産土神だと生玉神社の宮司は仰っています。神事の時の祭神として住吉神四座・大依羅神四座・海神(垂水付近にある)二座・垂水神二座・住吉神二座と大阪湾沿岸の神と住吉周辺の神が出てきますが、生島の神は出てきません。私も不思議だなあと考えていますが、レジュメにあげたように朝廷から派遣される宮主(天皇・皇太子・中宮に附属して身辺の安穩と穢の除去に従事する)・神琴師(この儀式で琴を弾く)のあとに生島巫、生島の神に仕える巫女さんが出てきます。そうすると本来は、八十島祭という天皇が即位した後に天皇の地位を保証する神事の時には生玉さんが出てくる方が普通だったのだと思います。歴史的にどこかに錯誤があるのかもしれませんが、これについて未だちゃんと研究していませんが非常に興味を持っています。天皇が即位した時に大嘗祭を行います。多分これはモンゴル系というか中央アジア系の神事に近いと思いますが、真床覆衾という毛布のようなものに天皇がくるまり、先の天皇からの引き継ぎを受ける、つまり天皇の祖先と同衾することにより次の世代の天皇の地位が認められるというものです。あまり簡単に言ってしまうと叱られるかと思いますが、いわゆる騎馬民族説につながるか

と思います。それに対して八十島祭は難波の海にやってきて、そこに祭壇を作りその祭壇に神を呼び、その祖先の霊を衣にのせ、京都に持ち帰って天皇が着ます。そうすると来る方向が違います。中央アジアの神は、内陸部ですから上から降りて来ますが、大阪の神は向こうから来ます。

このことについてあまりにも難しいのでちゃんと勉強していませんが、学生の頃に奄美大島の方に行きました。徳之島でたまたまお盆に泊めて貰った家の主人が、これから浜に下りる「浜下り」をするので連れて行ってやると言われました。この行事の主人公は「新浜」と呼ばれる去年のお盆から今年のお盆までに生まれた赤ちゃんが主人公のお祭です。海辺に海に向かって小さな祭壇を作り、お供えをして拝みます。そして、「新浜」を波の所に連れて行って、打ち寄せる波に足をポチャポチャと打たせます。これによって祖先とこの赤ちゃんが一緒になって一族の者として認められます。今日までは、どこの子とも分からない子どもだったが、これで家族の一員となりましたという行事です。それが生玉神社の八十島祭と重なって、どこかに関わっているのではと思っているのです。ごく単純に言ってしまうたら海人族の行事だったと言われてしまいそうですが、そういう関係で上町台地の上の神様が天皇の祖先と絡む神事に関係していることに興味があります。

そしたら平安時代の行事であって、奈良時代はどうなのだという事になります。奈良時代の天皇7人のうちの6人までが即位したら、八十島祭をしたとは書かれていませんが、大阪に来ています。岡田精司先生は、多分、天皇自らが来て八十島祭をやったのだと言っています。大阪湾で祖先と対面し、天皇としての存在を意義づけて貰う行事というのは一体何なのかということになります。河内という地域の重要性があります。この頃河内王朝説という考えは評価が低くなっています。私の恩師の直木孝次郎先生とか岡田精司先生もそうですが、河内王朝説ということで、上町台地にシンボリックな物を作った人達が河内を中心とした王権を築いたのではないかと仰っているのですが、そうではなく、それは大和の王権のちょっと変質したものだというような説の方がこのごろ有力で、あまり河内王朝説は大きな声で言うとは一遍に叩きつぶされる恐れがありますが、先程申しました上町台地の上にあるシンボリックな施設、西の方から大阪を見ることによってものを考えると、いうふうな関連性の中で考えて行きたいと思っています。そしたら何故そんなに大事な物が、9世紀末になると、衣に天皇霊をつけて来るだけで終わるのかと言われるとよく分かりませんが、何か非常におもしろいものを感じざるを得ません。

## 難波津と住吉津

住吉界隈の遺跡のことに漸く到達したのですが、資料1の図31をご覧ください。地図の一番北に難波津があります。難波津が何時出来たのか。5世紀の仁徳天皇の頃に、これは仁徳天皇の存在を認めた上で言っているということではありませんが、仁徳天皇の頃の伝説として難波の堀江ができて河内の水が難波の海に流れるようになり、開発が進みます。それとともに難波に都が造られたり、外交施設が造られて難波津が大事な役割を果たすようになります。その場所はどこかという、ずっと以前、私たちが考古学や古代史の勉強を始めた頃には、道頓堀の近くにある三寺のミツは「御津」で難波津であるというのが定説でした。ところが遣唐船が広島島の江田島の近くの倉橋島で造られ、難波に廻送されてきて、難波の浅瀬で座礁して沈没するのですが、座礁してしまうような、港としての機能が不十分な難波がミツだというのはおかしいという説もてきました。さらに、推古天皇の時の記録が丁寧に読まれて検証されて、実際の難波津は今の高麗橋界隈、中之島を流れる大川から東横堀に入る辺りだと言われて、現在はそちらの方が有力な説になっています。

それに対して、四天王寺の近くも港の可能性は残されています。ちょっと北へ行きますが長堀川と東横堀川の接点のすぐ南側に住友が江戸時代に銅吹所を作っていました。この銅吹所の調査で深いところまで一部掘ったのですが、ここで船の祭に使われるようなものがたくさん出ました。そういうことからあの辺りに港があったと考えてもよく、もう少し広い範囲を考えるとあの辺から四天王寺への繋がりは出てくるだろうと思います。さらに南へ来ると住吉津、住吉大社の界隈に来ます。これが、少し南へ行ってぐるっと東へ振るとどうなるかというのがこれからの話です。資料1の「図5大阪平野とその周辺の地形」に黒丸で濃く塗りつぶしてある住吉大社の下に遠里小野遺跡と書いてありますが、遠里小野遺跡を示す範囲の下の部分にぽつんと点が打ってあります。ここはどうなっている地域かということ、左の「図6周辺の字名」を見てください。ここでも小字名を調べました。現在まで残されている古い地名から何か手がかりがないかを捜している仕事です。この図の黒く四角く塗りつぶしてある所が発掘調査をしたところでした。その右に白い丸が打ってあるのは大阪市が戦前に調査をしたところでした。それよりずっと右手にOR05-1・OR07-1と書いています。ORというのは遠里小野、05は2005年、-1は1番目に調査をしたところを表します。ここは朴津です。過去の調査でもこの辺りで飛鳥時代から奈良時代にかけての瓦が出てきたりしています。お寺のあ

ったところといえます。榎夏で詠んだ、榎夏の浜から見ると武庫の裏が見えるという歌が『萬葉集』にあります。大阪湾全体を見渡すことができる場所であるということを見せてくれる資料だと思います。先程は西の方から東を見たという話をしましたが、逆に言うと東の方から大阪湾の北岸の方を見ることが出来るわけです。そこには武庫の行宮があります。孝徳天皇は難波長柄豊碕宮から有馬温泉へ行きます。その行きか帰りに、武庫の行宮に立ち寄っています。武庫から船で川を遡って有馬に行きます。今日は「古代における難波から有馬への道」という論文を紹介して頂きました。歴史地理学者で大変有名な足利健亮先生が、難波と有馬をつなぐ直線の道を論文で書かれましたが、大阪にいて考古学をして地べたを知っていたら、先生が言われるように難波から北に向けて直線と言ったらズブズブの湿地帯で歩けるものではなく、難波から行くのは船に乗って武庫の下流にたどり着いて有馬に行くべきだという論文を書いたものです。反論を書くと仰っていた先生が亡くなりましたので、この論文が潰れないでおります。

さらに大阪湾を通して私がおもしろいと思っているのは現在の信太山にいたる地域から、芦屋から神戸にかけての地域に直線で船がいけます。そういう関係のことを示してくれるのが東灘区と灘区にある3つの古墳をめぐる『萬葉集』の長歌です。3つ歌があり、信太の男、または高石の男と呼ばれる男が<sup>あしやのおとめ</sup>芦屋処女の所に通ってきて、芦屋処女にはいい仲の芦屋の男がいたのに三角関係が出来ました。その女性は死んでしまい、先にその情報を知った高石の男が後追い自殺をします。芦屋処女は自分の後を追ってくる者が本当に自分を愛しているといった歌を詠んだという話です。一歩後れを取った芦屋の男も、自分もその女性に対して想いがあるのだとまた死にます。ということで3人のお墓が造られます。中央にあるのが処女塚古墳、東側にあるのが高石の男が葬られているという東求女塚古墳、西側にあるのが西求女塚古墳です。3つとも前方後方墳です。まんなかの古墳は北を向き、東の古墳は真ん中の処女塚古墳の方を向いて西に、西の古墳は東を向いています。処女塚古墳との距離関係は東の古墳が近く、西の古墳はちょっと遠く、後れを取った男の方がちょっと遠く造られています。古墳のあるところは古代の山陽道に沿ったところで、人が行き来をする中でこの古墳は何だろうという中でそういう話がでたといわれています。奈良時代には1人の女性をめぐる三角関係というのは割にいろんな所に残っているそうです。真間（現在の千葉県市川市）の

手児奈の話も他の地方からやってきた男性と、地元で仲良くしていた男性と三角関係になるので女性が自分で命を絶ったという話です。

大阪湾の泉州側から海を渡って向こう側にいけるという伝承が結構あるわけで、それに近いのが、これからお話しする遠里小野遺跡にあたります。資料3ページの「図88Ⅱ期の遺構平面図」をご覧ください。四角い穴の真ん中に丸いのがついていますがこれは掘立柱の建物の跡で柱が左右に5つ南北にも5つ、5間5間の柱があって、その中に2間3間の建物が建っています。(ここで言う間は1間6尺の間ではなく柱の間ということです。) さらにその上下にSP07とSP01というのがあります。これが外回り柱です。こんな柱の付き方をするのは楼閣風の、2階建ての建物ではないかと言われています。これのある場所は、先程の図5に遠里小野遺跡の先のところに大和川が描かれていますが、黒い点のあるちょっと奥の所です。崖があってここで海へ落ちます。この高いところから見れば西の武庫の辺り・明石海峡も見えらう、そういう所にこういう施設が造られるのは住吉津と関係のあるものではなかろうかと考えます。さらに左上の所に黒い点を線で結んでいます。これは模式的に表していますが、その外側に黒い線で囲ってあります。こういうものは塀があってその中に一つの建物が独立してぽつんと建っているという、非常に重要な何かを示していますが、遺跡だけからはよくは分かりません。さらにこの建物でおもしろいのは、SP07とSP01は建物の外に、中心線の所に建物から遠く離れて建っています。もう少し近くにあれば、弥生時代のももそうですが、建物の格式を示す棟持柱といえます。伊勢神宮の建物のすぐ外側にも太い柱がありますし、邪馬台国論争で立派な建物が出てきたという時に、棟持柱がありますからと言われます。そういうものではないかという説がありますが、この場所が特異な場所であると言えます。本当に住吉大社のあるところにあるのが住吉津なのか、ちょっと離れていますがこういう所がそうなのか、そういうことが今後の問題になってくると思います。この建物の周りには建物が出てこず、この1棟が際立った存在です。資料3ページの「図30掘立柱建物の規模比較」を見て頂ければよいのですが、市営住宅の建て替えに伴って発掘調査したところ、こんな風にまとまった建物は余り出てきませんでした。

次に遠里小野遺跡のもとの場所に戻ります。西へ数百m戻ったところですが、そこで何が出てきたかということです。図30の左側の資料が遠里小野遺跡で、右側は難波宮で、後で言います。左の

図の四角くなっているのは掘形といひ柱を埋めるために掘った穴です。そこに柱を入れて周りに土を詰めて建物を建てます。ですから丸がついてるのは柱の立っていた場所です。柱のあった場所が発掘によって分かったので遠里小野遺跡では柱と柱の間が3つ、3間分で、左端の交点の所はどういう訳か壊されていて分からなかったのですが、その次の柱を順に追いかけていくと都合8間分あることが推定できました。この間の柱と柱の間隔は2.3m、約8尺弱の寸法で建物が造られています。さらに西にどう広がるかは発掘区域がここで終わったため分かりませんが、少なくとも3間で8間以上の建物が東西方向にあるだろうと言えます。方位はこの建物の長い方が北を向いています。東西に正しい南北の方向に建てられています。

図30の右の図面は前期難波宮朝堂院東第二堂です。この建物は柱跡が4つあり3間で北の方に7間、これでは7間なのですが9間の所もあります。9間の所というのは上にある難波宮復元図の朝堂院第二堂は東も西も9間あります。第一堂は7間しかありません。方位としては真南北を向いています。建物を建てる時に真北を向いて建てることに一つの意義があると考えています。この場合、港に近い所の建物が都の建物と同じような規模なり、造り方をされているということに着目したいと思います。ですから住吉地域の重要性がこれで明らかになると思います。しかし、周りにいっぱい役所の施設があったり、一般の人が住んでいたりとすることはありません。今のところ発掘例が少ないため、この程度しか言えません。

真南北ということの意味を考えるのに、『大阪市住吉区山之内遺跡発掘調査報告書』から作った資料2を見てください。左の「図68古墳～奈良時代の遺構分布図」で真ん中を通っているのが阪和線です。線路の西側に市営住宅がたくさん建っています。木造の平屋であったものを高層化する時に調査しました。「図66建物群の変遷」は建物の方位を表していますが、これを見ると5世紀ぐらいから8世紀まで5期に分かれています。Ⅳ期とⅤ期の間に随分違いがあることが分かると思います。一番下のⅤ期(7世紀末葉～8世紀前葉)の建物は真ん中に建物の線がのっています。ほぼ真南北であることを示しています。7世紀の末から8世紀にかけては建物が南北方向に建てられます。それまでは建物の向きはバラバラです。正方位が意識されるのは都造りがきちんと行われるようになったということです。7世紀の中頃過ぎぐらいから天皇の住まいとしての建物は正方位を向くわけです。これは中国の「天子南面ス」という思想とも関係するわけです。

この地域で、難波宮から真っ直ぐ下りて来る道路、難波大道との方向性が意識されだしたのではないかと思います。さらに東西の線についても、磯齒津道にしても丹比道にしても大津道にしても、難波大道に直交するような形で設定されるようになります。そうするとこの場所の建物もひよっとすると難波大道が造られた難波宮の建設以降に存在するものではないか、ただし、そういうながら港を見下ろすような建物については、その立地条件の中で、武庫浦がよく見えるような場所に造られる、ここに住吉津とのなんらかの関わりを見いだすことが出来ないだろうか、という風に考えるのが私の今のところの遺跡から見た住吉です。十分自信がないので、今日はもう言いませんが、上田正昭先生が仰るような住吉津の存続期間をこういつていいのかな、八十島祭との関係を考えてみると住吉大社の大阪における歴史的な意味がこれでいいのかな、1800年祭といってもそれもいいのかなと色々な疑問が出てきます。お話をするために付け焼き刃で色々やった中で出てきた話で、まとまった話でなく、皆さん方には大変失礼なのですが、私にとっては住吉と難波ということで新しい研究をする切っ掛けを作らせて頂いたと思います。

## 財団法人住吉隣保館の動き

### 講座「住吉さんと地元の1800年から学ぶ」を終えて（ごあいさつ）

3月も半ばを迎えたとはいえ、まだまだ寒い中を多くの皆様が本講座にご参加頂きまして、御礼申し上げます。

昨年4月16日に、京都大学の名誉教授、世界人権問題研究センターの理事長であります上田正昭先生をお招きして講演会を開催して以降、月1回の講座を重ねて参りましたが、本日をもちもちまして終了を致します。

本講座を成功させるために実行委員会を立ち上げとりにくんで参りましたが、講座を終えるに当たり、実行委員会を代表しまして一言ごあいさつを申し上げます。

12回に及ぶ講座を通して、わたしたちが暮らし、働き場として住吉の地の歴史を、住吉大社を軸にしながら、様々な角度から学ぶことが出来たと思います。そのことによって、住吉に対する愛着が皆様方の中で、より深まったのではないかと思います。

この機会に、12回に及ぶ講座に快く講師としてお来し頂きました講師の皆様、また、講座の受付や進行のお世話を頂きましたNPO法人かなえ会の理事長・池田外英雄様を始めとする皆様、さらには、毎回の講義のテープ起こしと原稿化の作業を担当して頂きました横山芳子先生に、皆様とともに感謝申し上げたいと思います。ありがとうございました。

既にご存知の方も居られると思いますが、12回に及ぶ講座（本日の講座は4月になります）の内容は、財団法人住吉隣保館のウェブサイト（ホームページ）に掲載しておりますので、いつでも皆様にもご覧になっていただけますし、諸般の事情で講座にご参加頂けなかった方々にもご覧になって頂けます。是非、活用して頂きたいと思います。

なお、この場をお借りしまして、本実行委員会の代表でもあり、大阪市から市民交流センターすみよし北の指定管理を受けております財団法人住吉隣保館に関する報告をさせて頂きたいと思っております。一昨年の6月から申請作業を致しておりましたが、去る2月28日、大阪府の公益法人認定委員会におきまして、改めて公益財団法人としての認可を頂くことができました。ただ、建物としての隣保館は既になくなっておりまして、4月からは名称を「財団法人住吉隣保事業推進協会」と変更し、市民交流センターすみよし北の管理・運営を始めする公益事業を中心に事業展開をして参りますので、従来に増します皆様方のご支援を御願ひ致します。

さて、本年は、1922（大正11）年3月3日、京都の岡崎公会堂において「全国水平社」が創立されて90周年の年にあたります。この創立大会で採択されました「水平社宣言」は、日本における最初の人権宣言として、今日に至るまで多くの人びとに深い感銘を与え続けてきています。

人間の尊厳が脅かされている昨今の社会の状況をみましたときに、改めてこの「水平社宣言」の基本精神と90年に及ぶ部落解放運動の歩みから学んでいく必要があると思っております。その一環としまして、皆様のお手元に配布致しておりますように、来る4月22日

（日）午後1時半から、作家である高山文彦さんをお招きし、市民交流センターすみよし北の大ホールにおきまして「全国水平社創立90周年と松本治一郎」と題した講演会を開催致します。皆様方のご参加を呼び掛けます。

おわりに、昨年4月から本年3月までの本講座に熱心にご参加頂きました皆様に衷心より御礼を申し上げます。実行委員会代表のごあいさつと致します。ありがとうございました。

2012年3月14日

「住吉さんと地元の1800年から学ぶ」実行委員会代表  
財団法人住吉隣保館理事長 友永健三

## 公益財団法人住吉隣保事業推進協会所蔵映像記録データ目録の全容

(8ミリ、16ミリ・フィルム編)

国立民族学博物館外来研究員  
友永雄吾

### 映像記録データの全容

公益財団法人住吉隣保事業推進協会（旧財団法人住吉隣保館、以下、協会と略称）が所蔵する住吉地区に関わった資料には、これまで報告してきた絵画、民具、写真などに加え映像記録データが多数のこっています。その映像記録データは500点にのぼりました。整理してまず分かったことは、映像記録用の規格が1960年代から目まぐるしく変化してきたことです。

最初の規格は8ミリ・フィルムと16ミリ・フィルムです。協会が所有する8ミリ・フィルムは全部で176点あり、その多くは1巻3分のフィルムです。また16ミリ・フィルムは16点で、1巻100分の長さがあります。

次はU規格ビデオテープと呼ばれるもので、これはVHSビデオ・カセットを2倍ほどの大きさにしたカセットを使用したものです。協会はこのU規格ビデオテープを9点所蔵しています。

3つめはVHS-Cと呼ばれる規格で、これはVHSをおよそ2分の1サイズに縮小したものです。協会は11点を所蔵しています。このVHS-Cに対抗すべく1985年から製造されたのが8ミリビデオとして知られるHi8ビデオ・カセットです。これは120分もしくは180分の記録ができるもので、協会の所蔵は165点です。

5番目の規格は1995年に製造が開始されたDV規格テープです。このテープはこれまでの規格に比べ高画質で、そのため家庭用ビデオカメラとして大きく普及していきました。協会が持つその数は81点に達します。最後の規格はVHSで、その数は32点です。

この6つの異なる規格からなる500点の映像記録データは、住吉におけるまちづくりや教育、福祉に関連する人びとの取り組みを克明に刻み込んでいます。

次回から、6規格の中身について報告する予定ですが、来月号では8ミリ・フィルムと16ミリ・フィルムの192点に絞って報告します。



(6つの規格：上段左から8ミリ・フィルム・16ミリ・フィルム、U規格ビデオテープ  
下段左からVHS、VHS-C、Hi8、DV規格テープ)

## 「公益財団法人住吉隣保事業推進協会」の愛称とロゴマークの募集について

「財団法人住吉隣保館」は4月より「公益財団法人住吉隣保事業推進協会」として名称が変わります。「財団法人住吉隣保館」の50年にわたる実績と成果を引き継ぎ、今後も地域の生活の改善及び向上を図るための各種の事業を行うと共に、地域社会におけるあらゆる差別の撤廃をめざす運動を基軸に地域住民の人権意識を高め、コミュニティの活性化と社会の福祉の増進に頑張ってもらいます。そこで、今後も皆さんに親しまれるために「愛称」と「ロゴマーク」募集いたします。

**応募内容** 「公益財団法人住吉隣保事業推進協会」の愛称とロゴマーク

**応募時期** 5月1日(火)～5月31日(木)  
※締め切り日消印有効・持参可

**応募方法** 「愛称」と「ロゴマーク」の区別をつけて、応募用紙を応募先まで郵送または持参してください。

**応募先** 「公益財団法人住吉隣保事業推進協会」事務局  
市民交流センターすみよし北内 1F

〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東5-3-21  
電話 06-6674-3732  
FAX 06-6674-7201

**賞品** 各5万円相当の商品券

**選考** 当財団理事会

**発表** 公益財団法人住吉隣保事業推進協会  
ニュース、ホームページ、  
「解放だより」にて発表

公益財団法人住吉隣保事業推進協会  
ホームページアドレス

<http://sumiyoshi.or.jp>